氏　　名	小磯　透
学位の種類	博士（　体育科学　）
学位記番号	博甲第　９３３９　号
学位授与年月	令和２年２月２９日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	生徒の長距離走の学習態度の改善を目指した イーブンペース走学習を適用した体育授業実践の成果
主　　査	筑波大学教授　教育学博士　　西嶋 尚彦
副　　査	筑波大学教授　教育学博士　　鍋倉 賢治
副　　査	筑波大学助教　博士（教育学）　片岡 千恵
副　　査	筑波大学教授　博士（教育学）　木内 敦詞

論文の内容の要旨

小磯透氏の博士学位論文は、実施が困難であるとされている継続的な授業実践研究から蓄積された大量データを用いて、学習態度の改善と運動成績の向上から体育におけるイーブンペース走学習の成果を明らかにしたものである。著者は、体育における持久走/長距離走学習の否定的態度の実態、イーブンペース走学習を適用した体育授業実践における学習態度の改善と長距離走成績の向上、および低成績群における学習態度の改善と長距離走成績の向上の成果を明らかにしている。

その要旨は以下のとおりである。

（第１章）

第１章では、著者は本論文の研究背景として、学校教育の基準である学習指導要領における体育の持久走/長距離走学習の内容と経緯を検討している。長距離走の初出は、大正 15 年「改正学校体操教授要目」（現在の学習指導要領の前身）であり、以降も引き継がれたことを述べている。学習内容には、常にペースが示されており、持久走では一定の距離を走り続けること、長距離走ではタイム（成績）を向上すること、そのために“ペース”が持久走/長距離走に共通の学習内容となっていることを確認している。

（第２章）

第２章では、著者は本論文の研究背景として、持久走/長距離走の実践研究報告を検討している。持久走/長距離走学習に対する児童生徒の態度は否定的であることを指摘する報告が多く、それを改善する実践報告もあることを述べている。持久走/長距離走の授業研究においては、授業実践とデータの蓄積が大きな課題であることを確認している。

（第３章）
第３章では研究目的を述べている。本研究の目的は、体育における持久走/長距離走学習の児童生徒の態度を明らかにし、学習態度の改善と長距離走成績の向上を図るイーブンペース走学習を適用した体育授業実践の成果を実証することであり、そのために、２つの研究課題について検討している。研究課題１は児童生徒の持久走/長距離走学習の態度調査であり、研究課題２は長距離走の体育授業実践研究である。

（第４章）
第４章では研究課題 1-1 について述べている。児童生徒の持久走/長距離走学習に対する態度を明らかにすることを研究目的とし、質問紙調査を実施している。持久走/長距離走が好きである割合は学年進行に伴い有意に低減しており、持久走/長距離走学習に対する否定的な態度は、学年進行と学校種の進行に伴い増加していることを明らかにしている。

（第５章）
第５章では研究課題 1-2 について述べている。児童生徒の持久走/長距離走の学習態度の因子構造と因果構造を明らかにしている。探索的因子分析を適用して、意欲、成果、協働、好感、不快の５因子を抽出している。続いて、構造方程式モデリングを適用して、好感に起因した意欲、成果、協働に効果を与える因果構造を確認している。

（第６章）
第６章では研究課題 2-1 について述べている。児童生徒の持久走/長距離走学習に対する否定的な態度の改善を図る授業実践研究の成果を明らかにしている。授業実践では、イーブンペース走学習を適用することに起因する否定的な学習態度の改善や運動成績の向上の成果を実証している。

（第７章）
第７章では研究課題 2-2 について述べている。長距離走の低成績群でのイーブンペース走学習の成果を実証している。単元後には、低成績群の構成人数は減少している。単元前後では、低成績群の運動成績は統計的に有意に向上している。好感、成果、協働、不快の態度の４因子得点のすべてが統計的に有意に向上している。これらの結果から、イーブンペース走学習による長距離走単元は、低成績群において有効であることを確認している。

（第８章）
第８章の総合考察では研究課題 1-1 から 2-2 で明らかとなったことを総括し、得られた知見の意義について述べている。本研究の意義は、授業実践研究を積み重ねることで、大量データを収集し、実証科学的な立場から、体育授業研究で指摘されていた解決すべき課題についての知見を得たことであると述べている。イーブンペース走学習を適用した長距離走単元の授業実践研究による学習態度の改善と運動成績の向上を確認したが、イーブンペース走学習を中核とする長距離走単元が良好な成果を生み出す理由を検証することは、残された今後の研究課題であると述べている。

（第９章）
第９章では、結論を述べている。研究課題 1-1 と 1-2 では、体育における児童生徒の持久走/長距離走の学習態度の推移と、肯定的学習態度の因子構造と因果構造を明らかにしている。研究課題 2-1 と 2-2 では、イーブンペース走を適用した中学校長距離走の授業における学習態度の改善と長距離走成績の向上、および低成績群での同様の結果から、イーブンペース走学習の成果を実証している。

審査の結果の要旨

（批評）
本論文は、実施が困難であるとされている継続的な授業実践研究から蓄積された大量データを用いて、体育における持久走/長距離走学習の児童生徒の態度を明らかにし、学習態度の改善と長距離走成績の向上を図るイーブンペース走学習を適用した体育授業実践の成果を明らかにしており、

学術的な新規性と価値は大きいと判断できる。また、学習指導要領にも長く位置づけられ続けているにも関わらず、児童生徒は持久走/長距離走学習に否定的態度を持つことが一般的であり、本研究が学習態度の改善や運動成績の向上の成果を明らかにした点についても、学術的新規性と価値が大きいと判断できる。学術的に検討されたイーブンペース走学習は、体力・運動能力、運動習慣等の向上のための体育などへの実用化が期待される。

令和元年１２月２６日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。